

ナイツ&マジック FMA(フルメタル・アナザー)

コレクトマン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とあるフルメタのAS好きな大学生が異世界に転生し、レーバティンとそのAIの相棒と共に色々とやらかす様です。

不定期更新かつリハビリを兼ねたテスト小説です。  
誤字や感想をお願いします。

# 目次

	Reincarnationからロックンロール	1
	Beastを狩る魔剣	10
22	自己紹介の後はNext Generation Knight	

## Reincarnationからロックンロール

彼はよくいる一般の日本人で、大学生でもある。彼自身は頭はそれほど良くはないが成績は悪く

はないといったちよつとした半端者であった。しかし、彼には他には負けぬある自信があった。

それは重度のロボオタであった。その大学生こと園崎一真は、あるロボットアニメのロボットが

好きだった。そのアニメの名は『フルメタル・パニック！』のAアニメ・スレイブSの独特なデザインや設定面

が彼を虜にした要因でもあった。

そんなある日のこと、彼はあるホビーショップでフルメタル・パニック！に出てくるASである

『ARX-8レーバテイン』のフィギュアを買った後に自宅に帰ろうとしていた。

「うーん…やっぱこの独特なフォルムとデザイン、たまんないなあ。」このデモリッションガンはロマンを感じるなあ〜！」

だが、そんな彼に悲劇が起きる。その帰り道の信号の歩道にて車が猛スピードで彼を真正面から

ぶつかった。この時に彼の意思はぶつかった衝撃で次第に薄れていき、走馬灯が見てた時に彼は

思った。

（ああつ…くそ、まだレアフィギュアであるベリアルを手に入れ損ねたのが無念だ……！）

人生の振り返りでも、事故に対する恨みごとでもなく。ただ単にASの限定フィギュアを手に入れ

損ねたことに対する後悔の念だった。

どれくらい時間が経ったのだろうか。彼の意識が戻った時、彼の周りにはSFロボットの

コックピットと思わせるモニターが彼を囲んでいた。そして、服装にも変化があった。

彼来ている服装は普段の私服ではなく、フルメタル・パニック!のパイロットスーツに着て

いたのであった。

「……………ここは……………どこだ？俺は……………何かに乗っているのか？」

彼はコックピット内の周りを確認して見た。そのコックピットのモニターに映るのは森林地帯の

風景であった。何処を見渡しても彼のみ映るのは木…木…木と、殆どが木に覆われていたので

あった。すると正面下のパネルから聞いたことのある声が聞こえてきた。

《おはようございます。園崎殿》

「……………この声……………まさか、アル？」

《肯定。園崎殿は異世界転生の一人目になった一人としてこの世界に転生しました》

アルの言う異世界転生という言葉聞いた彼は、彼自身がこの未知の異世界に転生した事を

理解したと同時に後悔もした。

(マジか……………やっぱり無理してもレアフィギュアであるベリアルを買ってあげれば良かった……………)

《園崎殿、落ち込んでいるところ済みません。貴方にはこの世界について説明しておくことが

あります、心して聞いてください》

アルからこの世界の文明や技術、そしてASより少し背が高めの幻晶騎士と呼ばれる対魔獣用の

ロボットや魔法があること知った。しかし、彼は彼で困惑していた。

彼は、魔法と呼ばれるものに実感を持てなかった。そして彼はアルから自分が乗っている機体の

事について聞き出した。

「アル：俺が乗っている機体は何なんだ？」

《ARX-7アーバレストの後継機：ARX-8レーバティンです。

このレーバティンはこの世界の

バランス調整の為にパラジウムリアクターではなく、この世界の幻晶騎士が使用するエーテル

リアクターを代用しています。因みにリアクターの説明は後々説明いたします》

アルの説明を聞きながら彼は、自分が架空の兵器であるレーバティンに乗れた事に感動していた。

(…なるほど。レーバティンの動力炉が変更されているんだな。確かに今の世界の技術じゃ

パラジウムを生成する事がまだ不可能だからな…。だからパラジウムリアクターじゃなくエーテル

リアクターに仕様変更されているんだな。それはそれで分かったのだが、まさか…俺が本物の

レーバティンに乗れる日がやってくるとは…！これは神様に感謝します！)

この時彼は、この世界に転生させてくれた神様に感謝するのであった。すると…突然微弱な揺れを

彼は感じた。

「ん…う…今のは地震か？」

《否定。これは超大型魔獣による歩行の余波地震です。距離役1500mに超大型魔獣と交戦して

いる幻晶騎士がいます。園崎殿、どういたしますか？》

「いや…どうしようにも俺は此奴の動かし方をまだ知らないぞ！」

彼の言う通り、園崎はこの世界に転生したばかりでASの動かし方

を知らない。しかしアルは

そんな事を予想していたのか彼にある事を話した。

《問題ありません。園崎殿がこの世界に転生する時に神から貴方の脳にASの操縦方法を事前に

入れ込まれています。ですから操縦方法は知っているはずです》

「いや…そんなご都合主義な展開があるわけ…ツ!？」

すると彼の脳裏にいろいろな情報が流れ込んできたのだ。突然の情報量に彼は激しい頭痛を

感じた。そしてその頭痛は次第に薄れていき、彼は一旦一呼吸を置いてレーバティンを操縦する

為のコントロールレバーを触れてそしてペダルを踏み込んでレーバティンを動かしてそのまま

超大型魔獣と幻晶騎士がいる方に向かって走った。

「何だ…これ…!…」

《これなら行動や戦闘に支障はありません。それでは行きましょう

軍曹》

「いや…俺軍属に入っていないんだけど…まあいつか。じゃあ…行くぞアル!」

《了解》

そして彼、園崎はレーバティンでその超大型魔獣の方に向かうのであった。

園崎が超大型魔獣の足跡を辿ってみると、アルが言っていた幻晶騎士達が超大型魔獣と交戦して

いた。園崎はアルから現場状況を確認してもらった。

「アル、あれが例の超大型魔獣か？見た目は亀みたいだが……」  
《肯定。師団級魔獣ベヘモスです。体内に宿る魔力で身体強化魔法を  
体全体に回し、より硬い

甲殻とその重い体を支えているものと推定します。そしてそのベ  
ヘモスと交戦しているのは

フレメヴィーラ王国の第一世代型幻晶騎士サロドレアを改良した  
白いサロドレアと赤茶褐色の

サロドレアと断定。そして、向こうで焼かれたサロドレアはベヘモ  
スにやられて騎操士は死亡

しているものと断定。軍曹、どういたしますか？》

「どうもこうもない、助け出さずぞ！（ここで彼らを死なせたら、俺たち  
は野宿する羽目になる！

…どうでもいい事だが、ベヘモスの名前：確かフルメタにもいたな  
…）」

事実上、レーバティンにはサバイバルキットが存在しないため何と  
かどこの国でもいいから

寝床を確保の為に行動するのであった。するとベヘモスが赤みの  
増した茶褐のサロドレアに

向けてブレスを吐き、そのサロドレアの動きを封じた。ベヘモスの  
ブレスによつてサロドレアの

下半身が地面に埋まってしまい身動きができない状況に立たされ  
ていた。

「くっ………このー！」

サロドレアは駄目元で手に持つ魔導兵装で火の槍を<sup>カルバリン</sup>ベヘモスの顔  
に当てるが効果は虚しく、ベヘモスは

平然としていた。

「………っ！逃げられない！」

ベヘモスが動けなくなつたサロドレアに向けてブレスを吐こうと  
していた。絶体絶命のその時、

ベヘモスの顔に火の槍とは違う黄色の閃光の何かが直撃した。ベ  
ヘモスの左目に直撃した。



ベヘモスは左目の視力を失い、激しい痛みを咆哮で表せながら怯むのであった。

「何っ?!今のは…!」

ベヘモスのブレスで下半身が地面に埋まっているサロドレアの改修機であるトランドオーケスの

騎操士であるヘルヴィ・オーバーリは、先ほどベヘモスに当たった謎の砲撃が飛んで来た方に

向けると、サロドレアより少し小さめな白と赤の幻晶騎士がいた。正確には幻晶騎士ではなく

ASであることは今のヘルヴィには理解できなかった。すると白いサロドレアの改良機である

アールカンバーに乗るエドガー・C・ブランシュがヘルヴィの救出しに来たのであった。

「ヘルヴィ、大丈夫か?まだ動けるか?」

「ええ、何とか。でも立ち上がるのがやっとだわ。それに…あの幻晶騎士は…?」

エドガー達は園崎が乗るレーバティンを見た。幻晶騎士より少し小さめな約8m強位だった。

本来幻晶騎士のサイズは約10m強位である。そしてレーバティンの音声スピーカーから園崎が

エドガー達に告げた。

「こちらレーバティン!援護する、今の内に後退しろ!」

園崎はレーバティンが手に持つOTTOメララ「ボクサー2」76mm散弾砲をベヘモスに向けて

いつでも撃てる様に構えた。するとアルから何かしら接近してくるのをセンサーで感知し

園崎に接近警報を報告した。

《軍曹、接近警報。数は一、機種は幻晶騎士と推定》

「幻晶騎士…?増援か?にしては数が足りなすぎる…!!?」

園崎が接近してくる幻晶騎士のことを考えていると紅の幻晶騎士がAS以上の動きをして

自前の赤い剣でベヘモスに斬りつけるが弾かれる。園崎はアルからある事を聞き出した。

「アル…幻晶騎士はAS以上の動きをする機体なのか？」

《否定。恐らく騎操士が幻晶騎士のリミッターを外して動かしているものと推定》

「ディートリヒ?!戻って来たのか?!」

アールカンバーのエドガーが紅の幻晶騎士の騎操士の名を呼んだ。しかし、紅の幻晶騎士からは

応答がない。通信を入れるのを忘れているのかそれとも……園崎がそう考えるが今は先ずアール

カンバーに乗るエドガーとトランドオーケスに乗るヘルヴィに戦線を離脱ように指示した。

「その白い幻晶騎士!まだ動けるか？」

「あ…ああ。だがヘルヴィのトランドオーケスが立つのがやっつこの様だ。私はヘルヴィを運んで

ここから離れる。レーバティン殿、できればディーを援護してくれないか？」

「肯定だ。あの紅の幻晶騎士は俺が面倒を見る。お前達は先に離脱しろ！」

「感謝する。すまないディー!今騎士団を呼んでくる!少しの間持ちこたえてくれ！」

エドガーはアールカンバーでヘルヴィが乗るトランドオーケスを抱えて戦線を離脱するので

あつた。そしてこの場に残ったレーバティンと紅の幻晶騎士は超大型魔獣ベヘモスと対峙する

のであつた。ベヘモスはレーバティンに殺気を放ちながらブレスを吐いた。

ベヘモスはレーバティンが己が左目を奪った奴と本能で直感し、怒りと本能のまま必要以上に

レーバティンを集中的に狙い、紅の幻晶騎士には目もくれなかつた。

「く…っ！思った以上にお怒りの様だ…。アル、ベヘモスに対して有効な兵装はあるか？」

《肯定。ベヘモスの甲殻を突き破るには165mm多目的破碎・榴弾砲（デモリツション・ガン）が

有効。しかし、弾薬の製造が確立していない為推奨致しません》

アルからベヘモスの甲殻を突き破る兵装はないかと聞いてみた。レーバテインの基本携帯火器

であるデモリツション・ガンを題に出したが、まだデモリツション・ガンの弾薬の製造方が

まだ確立していない為に没になった。だが、園崎はレーバテインの奥の手であるアレを知って

いるのでアルにレーバテインの奥の手を使用できるかどうかを確認した。

「なら、ラムダ・ドライバはどうだ？ラムダ・ドライバの斥力ならベヘモスの甲殻を破れる。

アル、ラムダ・ドライバを使用した時活動限界時間はどれぐらいだ？」

《…推定上5分が限度です。しかし、ラムダ・ドライバを攻撃に転換する際に操縦者の精神力に

左右されます。初めて使う軍曹には部の悪い賭けかと…》

「…だがどの道、やらなければ俺達が御陀仏になるだけだ。部の悪い賭けに賭けるしかない！」

アル、ラムダ・ドライバを使うぞー！

《了解》

アルの掛け声と同時にラムダ・ドライバを起動させた。するとレーバテインの頭部ユニットの

後頭部から白い髪と思わせる放熱策が展開された。そして園崎はボクサー2を腰にマウントし、

両膝のハードポイントに2振り装備されているGRAW―4単分子カッターを両膝共パージし、左右

それぞれに手に持って走り、紅の幻晶騎士を追い越し、そのままベ

へモスに突っ込んでいった。

それを見た紅の幻晶騎士の騎操士……ではなく、一人の幼き学生がレーバティンを見て、まるで

子供の頃から欲しがっていた時の目をしていた。

「幻晶騎士とは違うロボット……なんと素晴らしい！僕が前世の頃に作ったプラモデルの様に

幻晶騎士とは違う独特なロボットに出会えるなんて！何とか、あのロボットのパイロットと

コンタクトを取れないでしょうか？そうと決まれば、即行動あるのみです！」

紅の幻晶騎士に乗っている少年もとい、この世界に転生した倉田翼ことエルネスティ・エチエ

バルリアが初めて幻晶騎士以外のロボットであるレーバティンの感想であった。

そしてエルネスティもまた、レーバティンに続く様にべへモスに向かっていくのであった。

## Beastを狩る魔剣

レーバティンを操縦する園崎は、ラムダ・ドライバを起動させてGAW-4単分子カッターを両手に

持ち、そのままベヘモスに向かってベヘモスの左前足に単分子カッターを突き刺して、深く斬りつける。

ベヘモスは己が左前足の甲殻がいとも容易く斬りさかれる事

の驚きと左前足の切り傷からくる激しい痛みが同時にベヘモスに襲った。

ベヘモスは悲痛の叫びを上げながらも左前足でレーバティンを踏み潰そうとするが簡単に避けら

れる。さらにレーバティンは、駄目押しと言わんばかりに頭部に搭載されているGAU-19/S

12.7mmガトリングガン二門をベヘモスの左前足の切り傷に撃ち込んだ。

「体の大きさが仇となったな！」

ベヘモスは左前足の切り傷に12.7mm NATO弾を受ける  
とさらなる激痛が走り、レーバティンに

対する怒りが湧き上がる。ベヘモスは、お返しと言わんばかりにブレスを吐くがレーバティンは

軽々と避ける。するとアルが先程通信を受け付けなかった紅の幻晶騎士の音声を傍受した事を報告

してきた。

《軍曹、紅の幻晶騎士内の音声を傍受しました》

「紅の幻晶騎士の？分かった。アル、繋いでくれ」

園崎はアルに傍受した音声を繋ぐ様に指示を出して紅の幻晶騎士の騎操士の声を聞いた。

しかし…園崎にとって意外な結果が出たのであった。

「ははははははは！これがベヘモス！これが魔獣！」

「…!?この声…まだ子供か?!」

《肯定、紅の幻晶騎士の騎操士は約10代前半と推定。突撃を敢行しております》

紅の幻晶騎士は自前の長剣でベヘモスに斬りつけるがベヘモスの甲殻が邪魔で本体に傷つけること

すらできなかつた。ベヘモスはレーバティンの次に邪魔な紅の幻晶騎士にブレスを吐くが、紅の

幻晶騎士は軽々と躲し再びベヘモスに向かって突撃した。

紅の幻晶騎士ことグウエールはライヒアラ騎操士学園の生徒であるエルの先輩であるディートリヒ

・クーンツツが乗っているのだがベヘモスと戦った際、同級生のゲパードの惨死を目の当たりに

したことから恐怖心に駆られ、戦友たちを見捨てて1人逃げ出した。この時にそれを追ったエルに

グウエールを奪われて今はグウエールの中で気絶していることは今の園崎には判らなかつた。

「これが…幻晶騎士の戦闘！いざ、突撃です！」

「あーもー、いつからこは子供でも参入できる戦場になったんだ！とにかくあの紅の幻晶騎士を

援護するぞー！」

《了解》  
ラージュ

園崎は、レーバティンを動かして左足の膝に単分子カッターを収納し、グウエールの後を追って

同時にベヘモスの甲羅の上目掛けて飛び上がり、そのままベヘモスの甲羅に突き刺す。グウエール

の長剣はベヘモスの甲羅に弾かれて刺さらず、レーバティンのラムダ・ドライブで攻撃に転換し、

切れ味を増した単分子カッターでベヘモスの甲羅を蒸したジャガイモの様に簡単に突き刺すが、

単分子カッターのリーチが短い為に致命傷に到らなかつた。

「くっ…やはり短かつたか！」

「ワァ…！凄いですね！全身ほぼ隙間なく甲殻！無敵装甲！斬るだけ

無駄！魔法すら無駄！

なのにあのロボットはベヘモスの甲殻を常温のバターを切るかの様に簡単に突き刺すなんて！」

「その紅の幻晶騎士！一旦ベヘモスから降りて左前足を狙え！そこには俺が斬りつけた傷が

ある！」

園崎はグウエールに乗るエルにベヘモスの左前足を狙う様に指示を出した。

「分かりました！そうでしたら：巨大兵器破壊の心得その1です！」

エルはグウエールを動かしてベヘモスの尻尾の攻撃を躲しながら甲羅から飛び降り、レーバティン

が付けた左前足の切傷に目がけて長剣を突き刺す。ベヘモスは再び左前足の激痛に襲われながら

悲痛の叫びを放つ。グウエールは長剣を引き抜いてそのままベヘモスとの距離を取った。

そしてレーバティンは牽制がてらにG A U—19 / S 12.7 mmガトリングガンでベヘモスの頭部を狙い、

集中砲火を浴びせる。しかし、あくまで牽制なのでラムダ・ドライバを攻撃に転用せずそのまま

攻撃した為ベヘモスの頭部の甲殻は無傷だった。

「やはりラムダ・ドライバなしじゃ豆鉄砲扱いか……」

「あのロボットのバルカンを物ともしないなんて……！ひよっとして、全身中身まで硬いです？」

エルはレーバティンがG A U—19 / S 12.7 mmガトリングガンでベヘモスに攻撃してるのを見て、

ベヘモスの甲殻の防御力を見計らった。するとレーバティンのA Iであるアルがエルの疑問を回答

した。

《肯定、ベヘモスは身体強化魔法で甲殻や巨体を支えている様です》

エルはレーバティンから発した機械的に加工された声を聞いた瞬間、エルの目が再び輝きを増した

のであった。

「あのロボットから発する加工された声……まさか、そのロボットには特別なAIを搭載しているのですか！」

レーバテインに搭載されているアルのことAIと呼んだことに驚いたが、まだベヘモスの脅威が残っている為考えるのを後回しにした。

「詳しい自己紹介は後だ！先ずはベヘモスを倒さなければゆつくりすることできん！」

「分かりました！ベヘモスを倒したら、詳しい自己紹介をお願いします！でも……ベヘモスを倒すと

なると、これは……持久戦になりそうですね？……まあ、それはそれで構いません。僕は嫌いじゃないですよ？心ゆくまで幻晶騎士を味わえますから♪」

(……一体どういう環境に育ったらそういう狂った感じになるだ?)

園崎はエルから発する異常なロボットマニアのオーラの物を感じて若干引き気味になっていた。

グウエールは長剣を持ち直してベヘモスに向かい合う。そしてレーバテインは単分子カッターを

右足の膝に収納し、腰にマウントしている「ボクサー2」76mm散弾砲を手に持ち、ベヘモスに

目掛けて照準を向ける。そしてベヘモスはレーバテインとグウエールに向かって突進した。

ちょうどその時、グウエールの中で気絶していたディートリヒが目を覚ました。

「うー……ん??私は……一体?そうだ……あの時……確か、誰かが突然……!?!」

身体を起こしてグウエールの幻像投影機ホロモニターを見る。するとベヘモスが突進してくるのをディートリヒ

の瞳に映った時ディートリヒの顔は青ざめ、再びパニックに陥った。



エルは発狂しているデイトトリヒに目もくれず、ベヘモスの突進を躲すのであった。

レーバティンもベヘモスの突進をグウエール同様にベヘモスの攻撃を躲すのであった。

「ちよっ?!おま、おまえっな!?!」

「先輩、只今修羅場の真っ只中なのでお静かに願います!」

「何っ!?!あの紅の幻晶騎士の中にもう一人いるのか?」

《肯定、恐らくは紅の幻晶騎士の本来の騎操士だと推測》

アルが先ほどグウエールから男性の発狂の声を聞き取り、グウエールの本来の騎操士であると

推測する最中、エルはグウエールを動かして今度はベヘモスの右後ろ足に斬りつけるとグウエール

の長剣がベヘモスの甲殻の硬さに負け、刀身が折れてしまった。その事に気付いたエルは、一旦

ベヘモスとの距離を取って折れた長剣を捨てた。

「これはもう流石に使えませぬ?さて……」

「って、おい!武器を捨ててどうする?!」

「慌てるな!武器なら向こうのサロドレアの残骸に剣がある!援護するから取りに行け!」

「分かりました!」

グウエールは全速力でベヘモスの真下を駆け抜け、レーバティンは「ボクサー2」76mm散弾砲で

ベヘモスの注意を引く。グウエールはサロドレアの残骸の剣を回収し、そのままベヘモスの真下を

通過する。そしてレーバティンは、再びベヘモスの甲羅の上に飛び乗り、そのままグウエールの

元に向かって走り出した。グウエールの姿を目視したレーバティンは、そのまま甲羅から降りて

グウエールと合流した。

「これで今しばらく戦えます。…とはいえ、残りのマナは2割を切っています」

「そうか…アル、ラムダ・ドライバの残り活動時間は？」

《残り180秒です、軍曹》

「…そういう事だ。こちらも3分も過ぎれば後は動けなくなる」

「何う?!それでは不味いではないか!」

「問題ない、その前にベヘモスを倒せば良いだけだ」

「そうですね、せめて足の一本でも潰しておかないとどうにも格好がつきません!」

グウエールは先ほど回収した剣を手にベヘモスと向かい合う。そしてレーバテインも手に持つ

「ボクサー2」76mm散弾砲を構え直して向かい合い、第二ラウンドに入るのであった。

一方、フレメヴィーラ王国ヤントウネン市街地からフィリップ・ハルハーゲン率いるヤントウネン

守護騎士団がベヘモス討伐の為にフレメヴィーラ王国第二世代型幻晶騎士であるカルダトアと、

そのカルダトアの指揮官用に強化した幻晶騎士ソルドウオートに乗って出陣したのであった。

ヤントウネン守護騎士団は、ベヘモスの進行予想ルートに向かっている最中エドガー達の

サロドレアの改修機達を保護し、エドガーはベヘモスの所にはデイトリヒが乗るグウエールと

所属不明の幻晶騎士（ASだということをエドガーは知らない）の二機が未だ戦闘中だということを

聞いた守護騎士団の騎操士がヤントウネン騎士団長が乗るカル

ディアリアに報告をする。

「学生の練習機二機を保護、その学生の報告によれば未だ一機と所属不明の幻晶騎士一機が戦闘中

とのこと！」

「所属不明の幻晶騎士？それにたった二機で足止め？…にわかには信じられんが……」

フィリップは学生の幻晶騎士のことを考えていたが、所属不明の幻晶騎士がベヘモスと交戦してる

ことを考えていた。所属不明の幻晶騎士の目的は一体何なのかと……。

そう考えていると左方からベヘモスのブレスが通り過ぎたことを察知し左側を向くとベヘモスと

交戦しているグウエルとレーバティンを確認したのであった。

この時フィリップは、レーバティンやグウエールの動きを見入った。フレメヴィーラの幻晶騎士で

もあるはずが無い髪のように白い繊維が後頭部の方から出ており、本来の幻晶騎士の動きを凌駕して

いたのだ。またグウエルもレーバティン同様に本来の幻晶騎士の動きを凌駕していた。

「何だど？あれが幻晶騎士の動きなのか!？」

そしてグウエルとレーバティンもまた、味方であるヤントウネン守護騎士団を確認するので

あった。

「あれは…カルダトア！援軍だ！ヤントウネン守護騎士団が来てくれたのか!!」

「予想よりも少し早いですね。でしたら…そろそろ倒すことを視野に入れましょうか！」

《軍曹、朗報です。フレメヴィーラから援軍が到着致しました》

「援軍か…これで少しは負荷が減るか……」

園崎は、初めてラムダ・ドライバを起動してから斥力を攻撃と機動に回し続けていた為か精神が

疲労していた。こうしてレーバティンを動かし続けているのはある意味火事場のド根性と言うべき

であろうか。

「紅と白髪の騎士、よくぞ健闘した！今こそ我らヤントウネン守護騎士団の力を見せる時だ!!

全機拔杖！放てっ!!」

ソルドウオートに乗るフィリップの号令の下に全カルダトアが魔導兵装である火の槍でべへモスを

集中的に砲撃する。グウエールの中にいるディートリヒはこれを見て勝利を確信した。

「やったぞー！どうだ化け物め！」

「気をぬくな！まだ完全に倒したわけじゃない」

《肯定、べへモスは未だ健在。守護騎士団の魔導兵装では決定打を与えられません》

「そうですね…これで終わるほど容易くはないでしょうね？」

フィリップはヤントウネン守護騎士団に決戦兵器であるハードクラストバンカー対大型魔獣用破城鎚の使用指示を出す。

「一番、二番中隊はそのまま法撃を続ける！三番から五番中隊は鎚の用意を！六番から八番中隊は

三番、四番、五番中隊の援護！」

ヤントウネン守護騎士団全員が了承し、一、二番は魔導兵装で法撃を行い、三番、四番、五番中隊

は対大型魔獣用破城鎚をカルダトア4機掛かりで持ち上げる。

「対大型魔獣用破城鎚、用意しました！」

「よしっ！突けーっ!!」

フィリップの指示の下、対大型魔獣用破城鎚を4機掛かりで持つカルダトア達はそのままべへモス

の側面に向かって走り出し、残りの中隊はべへモスの注意を引くため魔導兵装で法撃する。

そして幻晶騎士による速力を活かして対大型魔獣用破城鎚をべへモスの側面に突き刺し、そのまま

本命の中央の大型鎚を風の魔法の恩恵で射出し、ベヘモスの土手っ腹に打ち込む。ベヘモスは

対大型魔獣用破城鎚を打ち込まれて悲痛な叫びをあげる。そして残りの対応型魔獣用破城鎚を

持った4機のカルダトア達はそのままベヘモスの死角に向かつて対大型魔獣用破城鎚を打ち込む

為に走り出す。するとベヘモスは、本能で危険を察知したのか顔を下に向けた。するとアルが園崎

にベヘモスの行動のことを知らせた。

《軍曹、どうやらベヘモスは真下にブレスを吐き、その反動で上半身をあげてカルダトア達を

一網打尽にするつもりです》

「何っ?! だったら尚更不味い! アル、ラムダ・ドライバの稼働可能時間は?」

《残り90秒。ここでひと暴れますか、サージェント軍曹?》

「ああ、そうさせてもらおう! アル、全てのセンサを無制限で使用しろ。最大戦速で突っ込むぞ!」

《了解》レンジャ

園崎はレーバテインの出力を最大限にし、「ボクサー2」76mm散弾砲を手にそのまま駆け抜け

そのまま足に力を込め、高く飛び跳ねた。

「食らえ!」

そして園崎はラムダ・ドライバのイメージの力で「ボクサー2」76mm散弾砲の弾丸を貫通する

イメージを流し込み、ベヘモスの甲羅に向けてそのまま76mm弾を撃ち込む。

ベヘモスはブレスを吐いてその反動で上半身をあげてカルダトア達を潰そうとする為にブレスを

吐こうとするが、背中から急に何かか打ち込まれた様な激しい痛みに襲われてブレスを吐くのを

止めた。ベヘモスの異変に気付いたフィリップは周りを見渡すと、

レーバテインがベヘモスの

甲羅に砲撃しているの確認した。そう：魔導兵装による法撃ではなく大砲による砲撃である。

「馬鹿な!? 幻晶騎士に大砲だと?」

レーバテインがベヘモスの前に着地し、そのまま左足膝の単分子カッターを取り出してベヘモス

の右前足に斬り刻み、更に駄目押しに「ボクサー2」76mm散弾砲を撃つ。

そして左肘からM1108対戦車ダガーを抜き出し、そのままベヘモスの右前足に投げつける。

対戦車ダガーがベヘモスの右前足に突き刺さると対戦車ダガーが爆散し、ベヘモスの右前足に

大きな傷跡ができた。無論ベヘモスもレーバテインの攻撃によって身体強化魔法が弱まり、

より動きが鈍足になってきたのだ。そしてレーバテインは、「ボクサー2」76mm散弾砲を腰に

マウントして最後の仕上げと言わんばかりに四番中隊の破城鎚隊から対大型魔獣用破城鎚を借りる

様に手に持った。

「最後の仕上げにこいつを借りるぞ!」

「なっ…!? 待て! 白髪 of 騎士、その対大型魔獣用破城鎚は幻晶騎士4機掛かりでないと持ち

上がらん代物だ!」

「問題ない。それと一つ訂正だ、俺は騎士じゃない」

そう言いながらラムダ・ドライバの斥力で重量の法則を無視して対大型魔獣用破城鎚を右手で掴み

それを軽々と持ち上げそのままベヘモスに向かっていった。これを見たフリリップは驚きを隠せ

ないでいた。無論グウエルに乗るエル達も驚いていた。デイートリヒはレーバテインの底知れぬ

力の前に啞然し、エルは瞳を輝かせながらロボットオタクとしての

ロマンを感じていた。

「何なんだ、あの白髪の幻晶騎士は？もはや幻晶騎士の常識を超えているー！」

「アハッ♪やはり凄いですね！あのロボットには僕の知らない技術があつて、あの大型の鎧を

軽々と持ち上げるなんて！……はっ！」

するとエルは、ベヘモスがレーバティンに向けてブレスを吐こうとしている処をみてすぐ、園崎に

回避する様に伝えた。

「いけないっ！避けてくださいー！」

「問題ない。俺は……」

園崎はエルの注告を無視しレーバティンを動かして対大型魔獣用破城鎧を持つてベヘモス正面に

向かって走った。そしてベヘモスは正面から突っ込んでくるレーバティンに対してブレスを

吐いた。ベヘモスのブレスを真面に受けたレーバティンを見たフィリップやフィリップが率いる

ヤントウネン守護騎士団は一瞬青ざめた。そしてグウエールに乗るデイトリヒが心強い幻晶騎士

がやられたと思い、再び死と言う恐怖心かられる。

「そんな…バカな…あの幻晶騎士が…もう駄目だ…みんな死ぬ、死ぬ」「……ません」「へっ？」

「許せません…ロボットを壊していいのは、ロボットだけなのですよ！」

エルはグウエールを動かしてベヘモスに向かおうとしたその時……。

「スペシャリストだあああああ！」

園崎の掛け声と同時にベヘモスのブレスの中から対大型魔獣用破城鎧を持ったレーバティンが

現れ、そのまま死角である左目に鎧を打ち込む。ベヘモスは死角である左目にまた痛みが

襲われ、悲痛な叫びを上げながら悶え苦しんだ。そしてレーバティンは打ち込んだ反動を利用

してベヘモスとの距離を取って地面に着地した後、再び足に力を入れてそのまま飛び跳ねた。

「いけえええええええ！」

レーバティンは右手の拳を握り、そのまま鎚の中央に殴りつける。その反動で中央の鎚が

ベヘモスの左目を通して脳髄まで貫通させた。ベヘモスは脳髄を破壊されたことで意志を失い

身体強化魔法も解かれ、そのまま巨体の重さによって倒れて力尽きてこの世を去った。

「……やったのか？あの化け物を白髪の幻晶騎士が倒した……！各隊、我々の勝利だ!!」

この光景をフィリップはヤントウネン守護騎士団全員に勝ち鬨を上げるのであった。

そしてベヘモスを倒した園崎はというと、アルからレーバティンの機体状況を確認していた。

《目標は完全に沈黙いたしました。丁度ラムダ・ドライバの活動限界時間ですので緊急冷却を

開始。約60分の間動かすことは出来ません》

「……そうか、分かった。アル……俺、もう動けそうに無い。しばらくの間、任せて良いか？」

《肯定、お疲れ様です軍曹殿》

アルにレーバティンの操縦権を渡して園崎はそのまま眠りについた。初回のラムダ・ドライバ

の使用によって精神が疲労し、限界が来たのだろう。

その後はフィリップ率いるヤントウネン守護騎士団はグウエールとレーバティンを保護し、その

ままフレメヴィーラ王国に帰投するのであった。



# 自己紹介の後はNext Generation Knight

ベヘモスが討伐されてから翌日：フレメヴィーラ王国の王都カンカネン「シユレベール城」にて

フレメヴィーラ国王である第10代国王「アンブロシウス・タハヴォ・フレメヴィーラ」が

ヤントウネン守護騎士団長フィリップとヨアキム・セラージェイからベヘモスとの戦闘における

報告を受けていた。

「フウ……この者といい、あの白髪の幻晶騎士と騎操士……危ういのう。エルネステイとやらは

マジウスエンジン魔術演算機をその場にて書き換え掌握し、幻晶騎士の直接制御などと……事実だとすればもはや

正気の沙汰ではない。いくら聡明で類稀な能力を持っているとしても所詮は齡の12の童。

いずれ己の才に溺れるやもしれぬ。そしてあの小さき白髪の幻晶騎士の騎操士……我々の使う幻晶

騎士とは全く持つて桁外れな常識を打ち破る幻晶騎士で、対大型魔獣用破城鎚を一人で持ち、

ベヘモスの脳髓に打ち込みこれを討伐。そして小さき幻晶騎士には我々では解析できぬ大砲を

持ち、ベヘモスを圧倒せしめる高い戦闘能力とその騎操士の高い戦闘技能。どこの国でもない

謎の小さき白髪の幻晶騎士か……」  
アンブロシウス国王は、レーバティンと園崎の謎を未だ解析できぬまま考えるのであった。そして

フィリップは、アンブロシウス国王に追加の報告をする。

「我々はその白髪の幻晶騎士……もとい、その幻晶騎士の魔術演算機の進化系と名乗る「アル」と

やらがレーバテインと申しておりました。そのレーバテインはベヘモスの戦闘を終えた時にその

レーバテインの身体から白い煙を放出しておりました。アル殿によるときんきゆうれいきやく?と

呼ばれる物でレーバテインの体内熱を冷やしている間動けないと  
のことで手の空いたカルダトアに

レーバテインを運んでもらい、カンカネンに運んだ次第です。そしてそのレーバテインの騎操士は

アル殿によりますと、過酷な精神疲労で眠っているとのことですが  
アンブロシウス国王はフィリップの報告に領くと、国王は時を見計らってエルネスティと園崎との

接触のことを考えるのであった。

「エルネスティ・エチエバルリア……そして、レーバテインの騎操士。時を設け、一度会って

みねばならぬな」

一方……レーバテインの中で眠っていた園崎は、フレメヴィーラ王国の騎操士の手で診療所に

送られ、診療所のベットの上で眠っていた。余談ではあるが、レーバテインから園崎を引き出す

時にAIであるアルが喋りだしたことでカンカネンの騎操鍛冶師ナイトスミス達は混乱していたことはこの時

眠っていた園崎は知らない。そして園崎は、ようやく長い眠りから眼を覚ますのであった。

「……ん。ここは……レーバテインの中じゃ無い?」

園崎は身体の上半身を起こして辺りを見渡した。多数のベットに

白いカーテン。そして己が服装は

そのままであった。園崎は、此処は診療所だと判断した。

「……そういえば、レーバテインのラムダ・ドライバの使用による精神疲労で眠って……今思い

返せば、何で俺……ラムダ・ドライバが使えたんだ？」

そう考えていると扉が開くと銀髪の少年と黒髪の兄妹が入ってきた。

「あつ……起きたようですね！」

「彼がエル君が言ってた小さい幻晶騎士の騎操士？」

「あのベヘモスを一人で倒した騎士……なのか？」

園崎は銀髪の少年の声を聞いた瞬間、あの紅の幻晶騎士に乗っていた子供だと気付いた。

「その声……まさか、あの紅の幻晶騎士に乗っていた少年か!？」

「ハイ！あの時は自己紹介ができない状況でしたので改めて自己紹介します！僕はエルネスティ・

エチエバルリア。皆さんからはエルと呼ばれています。こちらの

二人は……」

「アデルトルト・オルターよ。アディって呼んでね！」

「アーキッド・オルター。アディの兄で、みんなからはキッドと呼ばれている。よろしくな！」

「エルにアディ、キッドか……宜しくな。俺は園崎……あついや、ここだと名前が先か。」

俺はカズマ・ソノザキだ……カズマと呼んでくれ。妙な名前かもしれないが気にしないでくれると

助かる……」

それぞれ自己紹介を終えた時、エルは目を輝かせながら園崎に質問するのであった。

「それじゃあカズマさん、あのロボットについて教えてくださいませんか？」

あの独特なデザインと武装は

本当に素晴らしいですね！あのベヘモスのブレスの中でどうやって防いだんですか？もしかして

僕の知らない技術でベヘモスの攻撃を耐え凌いだのですか？是非、僕にも教えてください！」

「ま…待て！…いっぺんに喋るな！喋ろうにも立て続けに質問されたら答え難いだろう？」

エルの激しい質問せめに答え難くなる園崎をみたアデイ達は園崎に同情し、エルの異常なロボオタ

に若干引き気味になるのであった。

「うわあーっ…エル君のまた悪い癖が…」

「あいつ…あの小さい幻晶騎士を見て以来あんな感じだからなあ…」

「小さい幻晶騎士？それってレーバテインのことか？」

「レーバテイン！あのロボットの名前ですか？北欧神話の武器の名前をつけるなんて、凄く良い

ですね！」

(な…なんでエルネスティが北欧神話のことを知っているんだ?)

なぜエルが北欧神話のことを知っているのか、園崎の疑念が残ったままエルの質問に答えるので

あった。それからベヘモス討伐から二日後、エルと園崎はエルの祖父でありライヒアラ騎操士学園

の学長ラウリ・エチエバルリアと共にシユレベル城の王座に向かい、国王からベヘモス討伐の

誉れと褒美を頂くのであった。なお…褒美については国王から望むものが有れば与えるとの事だ。

エルは、幻晶騎士の心臓部である魔力エーテルリアクタ転換路の製造法方の技術を欲した。

それを聞いた貴族は反対を申ししてきたが、国王が貴族を静ませエルの何故魔力転換路の製造法の

技術を欲するのかを聞くと、エル曰く…自分専用機の幻晶騎士を作る為であり、作る理由のことは

趣味だそうだ。これを聞いた園崎とラウリは呆れながら脱力するのであった。これを聞いた国王は

エルの幻晶騎士作りが趣味という回答に笑い、エルの願いを聞き入

れ、条件として新たな幻晶騎士

の開発で魔力転換路の秘を明かすに足る幻晶騎士を作れたらその魔力転換路の製造法を伝授する

ことを約束された。そして国王は園崎にも何が欲しいかと問い出した。

「……して、ソノザキとやら。おぬしはエルネステイと同様に小さき幻晶騎士……レーバテインと

申すか？その働きは聞き及んではおる。何が欲しい？申してみよ」  
国王の問いに園崎の願いは既に決まっていた。

「……では国王陛下にお願いたします。自分が欲するのは……このフレメヴィーラ王国の在中の

許可とエルネステイと共に幻晶騎士の開発に参加させて頂くことです」

「フム……我が国に在中するのは構わん……して、エルネステイと共に開発に参加する理由を

聞かせてはくれまいか？」

「はい。自分が開発に参加する理由としては二つ、一つは……エルが作る幻晶騎士とは違う別物を

作ることです。そして二つ目、ちよつとアレですが……エルの幻晶騎士好きの暴走を止めるための

ストッパー役です」

今の発言にエルは……「暴走なんてしませんよ！」と言いたげそうな顔をし、国王は園崎の意外な

理由にまたも笑うのであった。

「はっはっは……これはエルネステイも一本取られたそうだな。してソノザキよ、おぬしは何を

作ると申すのだ？」

「レーバテインと同じサイズで幻晶騎士とは違う機体……アーム・スレイフ Sでござ  
います」

国王から新型開発を命じられた園崎はエル達と共にライヒアラ騎士操士学園の工房に向かっていた。

園崎はエルネステイから聞いた話によると、園崎が眠っている間レーバテインは学園の工房で

レーバテイン解析するために置かれているとこのことを聞いてそこに向かうことにした。

そして学園の工房に到着すると外部装甲を取り外して内部修理されているグウエールと、その横で

座り込んでいるレーバテインを発見した。

「紅の幻晶騎士の内部修理か？…もしかして、ベヘモス戦の時に見たAS以上の動きをした所為で

金属疲労でも起こしてオーバーホールされてるのか？」

「アハハッ……恥ずかしながらそう言うことになりますね。でも…中破気味な機体もまた

美しいです……」

「はいはいっエル君。言う処が違うでしょ？」

「いひやい…いひやいれふなんれふか!？」

エルが園崎の疑問を答えると同時にエルのロボオタが出て、ツツコミと言わんばかりにアデイに

頬を引っ張られるのであった。するとそこにグウエールの騎操士であるデイトトリヒがやって

来た。

「む……君、その様子だと目が覚めたようだね」

「お前は……まさか、あの紅の幻晶騎士の騎操士か？」

「ああ、紹介がまだだったね。私はデイトトリヒ・クーニッツだ。デイトと呼んでくれ」

「そうか…俺はカズマ・ソノザキだ。よろしくなデュー。……ところで気になったのだが、その

目のクマはどうかしたのか？」

「あ…ああ。そ…それは気にしないでくれ……」

園崎はデイトリヒと自己紹介を終えると修理されているグウエールの後ろからひよっこりと

ドワーフことダーヴィド・ヘプケンが出てきた。

「おいっ銀色坊主エルネスティ！デューの野郎に聞いたらグウエールをあの有り様まで壊しやがった原因はお前

だって言うじゃねえか。野外演習の出発前に全身を新品にしたばかりだったのにそれがどうだ？

魔力がほんの少ししかない分、パーツの方は単体で見てもほとんどは金属疲労だらけ。

どうやったらこうなっちゃうのかさっぱりで、このままじゃ対策も立てられねえと来た！

一体お前は何をしでかしたんだ!？」

ダーヴィドはエルにグウエールの有り様の件を聴きだすとグウエールの隣で待機状態になっている

レーバテインの中のAIであるアルからエルの代わりに答えた。

《ダーヴィド殿、おそらくエルネスティ殿はグウエールの操縦桿のコードを自前の杖に巻きつけ

魔導演算機内の魔法術式スクリプトを転写し、自分で演算してグウエールを動かしたものと推測》

騎操鍛冶師達はアルの声を聞いても驚きもしなかった。一度レーバテインの中から園崎を引き出し

た場所は此処、ライヒアラ騎操士学学園のだ。無論、アデイ達もアルの存在を此処で知ったのだ。

そしてダーヴィドは、エルの出鱈目な行動に頭を抱えこむ。対してデイトリヒは、エルの行動

と園崎が乗るレーバテインのことを考えていた。

「推測ってな……普通は人一人の力じゃ幻晶騎士の魔法術式は演算し

きれねえ。だからこそ魔術

演算機があるんだぞ……？」

(なるほど……あれはそう言うことだったのか……なんと言う常識はずれな芸当を……)

……だとすると、ソノザキが動かしたレーバティンは何なんだ？あれはもはや幻晶騎士などでは

ない……まるで別次元の代物だ……)

「グウエールの結晶筋肉クリスタルティンキューの一部が疲労断裂している辺りあれか？坊主が直接制御したせいでの

反動に結晶筋肉が耐えられなかったのか？マジかよ……じゃあ何か？坊主が本気出しゃ……どんな

機体も〃即潰れるのかよ！それじゃあ対策しようにも対策しようがねえだろ！」

グウエールを修理するダーヴィドの苦労も園崎にも同意していた。確かにエルが旧世代の幻晶騎士

のリミッターを外して操縦すると終えた後には必ず潰れてしまうからだ。

その時に園崎は、アルにレーバティンのメンテとかのことを聞き出した。

「そういえばアル……お前、レーバティンの整備とかはどうしてんだ？」

「あー、俺もそれを聞こうとしてたんだ。お前、この機体は一体何なんだ？他の幻晶騎士や王族

専用機との違う。おかげで俺達の知らねえ技術ばかりでこいつの整備や調査は困難だ！一体どんな

技術が使われてんだよ！」

ダーヴィドの意見も最もで、俺もレーバティンの整備が出来なければ意味がないと思っていた。

するとアルから意外な答えを出した。

〈軍曹殿、ダーヴィド殿、レーバティンの整備についてはご心配なく……レーバティンのフレーム



骨格や内部パーツなどはナノスキンを使われているので整備の心配性はありません」

アルの意外な聞き慣れた単語を聞いて園崎は困惑した。

「ナノスキンって…!?おまつ…何つう物をレーバテインに搭載させてんだよ!」

ダーヴィド達はナノスキンという聞いたことのない単語に疑問に思いながらダーヴィドが園崎に

ナノスキンについて聞き出す。

「おいつそのナノ何たらってのはどういうもんだ?」

「あ…そこからか、ナノスキンってのは簡単に言うとは自己修復機能だ。人間で言う皮膚に

傷が付くと瘡蓋が出来るように時間が経てば新しい皮膚が再生し、瘡蓋を剥がせば新しい皮膚が

出来るというとんでもない技術だ」

園崎のナノスキンの説明にダーヴィドは余計に頭を抱え、エルは未知の技術に対して目を輝かせる

のであった。

「はあっ!?自己修復機能!?何だその出鱈目な技術は!」

「レーバテインに自己修復機能があるなんて…凄いですね!」

園崎自身はある意味、レーバテインにナノスキンが搭載されていることに呆れつつも結晶筋肉の

改善点について話題を逸らすのであった。

「…レーバテインについてはまた今度でいいか?今は結晶筋肉の改善点を見いださなければ

ならないんじゃないか?」

「あ…でしたら、僕に良いアイデアがあります!要は結晶筋肉の耐久性を上げればいいの

ですよね」

園崎がいう結晶筋肉の改善点についてエルは一つの本を取り出して結晶筋肉の改良案が書かれて

いるページを開き、園崎達に見せた。そのページには結晶筋肉の織

維が縊り合わせられた結晶

筋肉が描かれていた。

「こいつは…結晶筋肉の図面か？」

「はいっ！結晶筋肉を縊り合わせることで最終的な耐久性は上がり編み込むことで直線的に使う

より長い収縮距離が確保出来る。それは副次的に出力の増大にも繋がります。名付けて…

「ストランドタイプ・クリスタルテイン」  
「綱型結晶筋肉」！」

エルが提案した綱型結晶筋肉のテストを行うべく、ダーヴィドやバトソン達の騎士鍛冶師は加工

された結晶筋肉を縊り合わせて綱型結晶筋肉を作り、その綱型を結晶筋肉の稼動テスト用の

サロドレアの腕に通常で使われている結晶筋肉に綱型結晶筋肉を三割を差し替えて筋力テスト用の

幻晶騎士専用のダンベルを使い、片手で持ち上げるのがやつとの重いダンベルを片手で軽々と

持ち上げるのであった。

「なるほどなあ…筋肉の三割を差し替えただけで効果はてきめんだ…！」

「ああ…これはこれで凄いな。（そういえば…レーバテインにも結晶筋肉を使われているかを

アルから聞いてなかったな？…また今度アルに聞いてみるか）アル、綱型の事をどう思う？」

綱型結晶筋肉のテストの際にはアルことレーバテインも綱型結晶筋肉を差し替えたテストアーム

を観察した後データ分析し、性能情報を纏めアルは性能結果を答える。

《綱型と通常型と比例した結果、最大出力は従来の1.5倍。伸縮の繰り返しに対する耐久性は10倍

まで上がるという結果が出ました。しかしながら、同時に欠点も発見されました。

綱型を使う場合、視点となる骨格をサロドレア感覚で固定すると上がった分の出力に耐えきれず、

破損してしまいます。お勧めとしては全身の力学バランスを見直した方が良いと判断します》

「…時々思うが、君の相棒は本当に凄い奴だな」

《肯定》

「ああ…それに、冗談もうまいようだからな」

アルのデータ分析に感心するデイートリヒと園崎であった。そしてダーヴィドはアルの提案に乗る

のであった。

「そうか…骨格をサロドレア感覚で固定しても吹っ飛んでしまうか。だったらよアル、お前さん

から何かアイデアはないか？」

ダーヴィドがアルにアイデアが有るかと聞きだすと、アルが答えた。

《肯定、カルダトアの骨格をベースにサロドレアの骨格を強化をしてはどうでしょうか?》

「なるほどな、主力機の幻晶騎士の骨格をベースにすりやサロドレアの骨格も多少は見直せるかも

しれねえな…丁度いい、今修理中の機体で試してみるか!」

ダーヴィドが骨格の難点をアルが見出した解消案を採用するのであった。そして園崎は、幻晶騎士

の新武装案をダーヴィドに告げた。

「ダーヴィドの親方…だっけか? だったらさ、魔導兵装にも手を加えてもいいか?」

「魔道兵装にもか? そりやあどんなもんだ?」

「幻晶騎士が持つ杖。確か…火の槍カルバリンだっけ? それを杖ではなく、銃銃に作り変えたらどうだろうか?」

園崎の案にダーヴィドは杖をライフルに作り変えるという案に疑問に思った。

「銃ってな……そいつはお前さんのレーバテインの技術のもんだろ?」

杖を大砲に作り変えるって

なあ……」

ダーヴィドが園崎の案に悩んでいると、エルが園崎の案の利点に気づいた。

「なるほど！魔道兵装の杖を銃に作り変えることで幻晶騎士から魔力を送られて放つ杖ではなく

魔力が貯まった弾倉を使って銃に変えた魔道兵装を放つことで幻晶騎士の魔力切れを防ぐという

利点ですね！」

「ああ…エルが言うように銃に作り変えることで幻晶騎士から魔力を送って放つことなく、魔力を

貯めた弾倉を使うことで幻晶騎士の魔力切れを防ぐ役割を持つている」

エルの答えは園崎が考えた案と一致していた。そして園崎は、図面とペンを借りて火の槍を使った

銃型の杖の図面を描いた。園崎が描いた銃はM9ガーンズバックが使用するGEC—B 40mm

ライフルであり、その40mmライフルの銃口に40mmサイズの球体型触媒結晶が取り付けられて

いた。

「このようにこの銃の銃口を球体型触媒結晶を取り換える事で魔法が放つことができ、魔力が

貯まった弾倉を装填することで直接幻晶騎士から魔力を使うことなく魔力が貯まった弾倉を使う

ことになる。名付けて…魔法銃だ」  
マジック・ライフル

これを聞いたダーヴィドや他の騎士鍛冶師はざわめき、ダーヴィドはエルと園崎の発想力に驚く

ばかりであった。

「…全く、オメエら何モンなんだ？アレやコレや…どうしてそんな見たことも聞いたこともねえ

もんを作りたいがるんだ？」

そうダーヴィドが言うと、エルは当然の様に答えるのであった。

「何をおっしゃいますか！ 〃ないから創る〃のです！ あつたら創りません！」

「いや…俺も言えた義理でもないがそれを言うのはエル、お前だけだぞ…」

エルと園崎から様々なアイデアを出した結果…エルからは綱型結晶筋肉と補助腕サブアームと背面武装バックウエポンを

園崎からは魔法銃とASの火器管理システムファイアコントロールをベースにした幻晶騎士用の火器管理システムを

発案した。その後…今更かもしれないがエドガーとヘルヴィ、ダーヴィドやハドソンなどに自己

紹介を終えてヘルヴィからサロドレアの改修機であるトランドオーケスを素体に新型を開発を

始めるのであった。

翌日…園崎は訓練用の魔導兵装の触媒結晶を使って魔法銃を製作し、試作モデルであるGEC—Mを

開発する。そして試射を行うためにディートリヒを誘って予備のサロドレアを使って魔法銃の法撃

テストを行うのであった。

「すまないなディー、態々法撃テストに付き合ってくれて…」

「いや、構わんさ！ 私も君の言う魔法銃にも興味があつた訳だからな」

「そうか…それじゃあ、魔法銃の試作モデルであるGEC—Mの法撃テストを開始する！」

園崎はそう言うと甲冑の様な物を纏ったエルがやってきた。エル

が纏っているのはエルが発案した

幻晶騎士を小型簡略化した甲冑、シルエットギア幻晶甲冑である。

これを作っているのはライヒアラ騎操士学園の鍛冶師学科中等部である。

「あつカズマさん！どうですか？魔法銃の開発は？」

「ん？エルか…今から法撃テストを行う処だ。そっちの幻晶甲冑はどうだ？」

「んー…それなんです、エドガー先輩によると魔導演算機がないと動かしにくかったり、幻晶

甲冑の通気性が悪かったりと改善点が山積みです」

エルが幻晶甲冑を作った理由は、ここフレメヴィーラ王国は訓練用の幻晶騎士不足に悩まされて

いたのだ。そこでエルは、幻晶騎士の小型簡略化と安価を測って幻晶甲冑を開発したのだ。

「…未だ改善点が残っているってことか。それよりも今から魔法銃の法撃テストを行うところ

だが見ていくか？」

「…ハイーもちろん見ていきます！」

エルは園崎が提案した魔法銃に興味を持っていた。エル曰く、ロボットは銃を持つのは当たり前

のことです！”とのことだそうだ。それを聞いた園崎は思った。  
“この世界の魔法を使うロボットは

どうなんだろうか？”と……。

「よし…ディー！前にも教えたが、魔法銃を構える時は右手の脇を締めて、魔法銃のストックの

バットプレートマナ・マガジンを幻晶騎士の肩の全面に押し当てて左腕を開き過ぎない様左手でハンドガードを

しっかりと握ってくれ！」

「わ…わかった！…こうだな…」

ディートリヒはサロドレアを動かして魔力が貯まった弾倉こと魔力弾倉マナ・マガジンを装填した魔法銃を構えて

訓練用的に向ける。

「魔法銃構えよし、レクテイル照準器表示。照準合わせ…発射準備よし」

「よし…まずは単射セミオート射撃から始める！魔法銃のセレクトバーの白点を赤丸一個分の方に

向けるよう回してくれ！」

園崎の指示でディートリヒが動かすサロドレアは右手で魔法銃のセレクトバーを単射に切り替えた。

「単射に切り替え完了。……発射！」

そしてサロドレアは魔法銃の引き金を引いて銃口から魔法を撃つ。すると訓練用的に当たる。

その後、魔法銃の連射フルオートを試した結果…魔法銃による法撃は6割的に命中しており、他は

連射の反動のブレで的に当たらなかった。魔法銃の法撃テストを見ていたエルはさらに瞳を

輝かせていた。

「んんん！やはりロボットに銃は合いますね！」

「…やはり凄いものだね。この魔法銃は」

「ディートリヒ、御苦労さん。お陰で魔法銃の改善点が見つかった。魔法銃の魔力残量はどれくらいだ？」

園崎はディートリヒに魔法銃の魔力弾倉の残量を確認してもらうように頼む。

「ああ…魔法銃の残量は残り6割を切っている。あれだけ撃っておいてまだ弾倉の魔力が残って

いるなんてな……それに幻晶騎士自体の魔力貯蓄量マナ・プールは魔法銃の反動を抑えるため

に使った所為か魔力貯蓄量が8割を切っている」

「そうか……ストックの方を改善するのもありかもしれないが正式仕様の魔法銃を作らないとならない

からな。まあ…魔法銃に魔導演算機を搭載して、魔法術式をエルにオリジナル魔法である連続射撃ラピッドファイアを

作ってもらって組み込んだのはそれはそれで良しとするか。後は

魔法銃の次に開発する新たな新型

を作るプランを実行するだけだな」

そう言って園崎は、懐にしまっていたある図面を開いて新たな新型プランを考えていた。

そのプランは、幻晶騎士とASのハイローミックス機を作ることであつた。

その図面に書かれている機体名は、  
“Plan1100Y  
FORUSU KNIGHT”。

フルメタの敵組織であるアマルガムが開発したラムダ・ドライバ搭載試作型であるAS

Plan1056コダール初期型をベースにこの世界の幻晶騎士であるディートリヒが使う

グウエールの頭部ユニットをベースに新しく作り変え、コダールの頭部ユニットと取り

替えただけの簡易的なプランであつた。

「その為には先ず、各幻晶騎士のフレームを一から知る必要があるな。そうと決まれば行動

あるのみだ！」

こうして園崎は、この世界で初のAS開発に躍り出るのであつた。